

高校生を対象とした協同ブロック制作の試み

—— 個別描画場面との比較を通じた制作体験の検討 ——

加藤大樹¹⁾

服部香子¹⁾

伊藤里実¹⁾

森田美弥子

I. 問題と目的

臨床心理学の分野においては、これまでに多くの技法が開発され、活用されてきた。この中に、芸術療法の諸技法がある。芸術療法は、元来、様々な表現を通して、治療的効果を得ることや、臨床心理学的アセスメントの手段として活用することを目的として開発されてきた。芸術療法の技法は、その特徴から、個別面接場面における利用のみでなく、グループセラピーや、他者との関係性を学ぶ機会としてのエンカウンターグループなどの中でも活用されている。

コラージュ技法は、元々は個別臨床場面における活用を目指し、森谷（1988）によって開発されたものであるが、その表現の多様性から、グループの中での使用もされている。森谷・杉浦（1993）は、コラージュ技法のグループでの使用として、集団絵画療法としての用い方、自己啓発技法としての用い方、リハビリテーション分野での用い方などを紹介している。鈴木（1999）は、集団によるコラージュ制作を、「サラダボール・コラージュ」と名付け、異文化間カウンセリングの中で活用している。また、青木（2001）は、グループにおけるコラージュ制作の効果を、POMSを用いて検討している。その結果、コラージュ制作が気分変容に対してポジティブな影響を与えることや、制作後のシェアリングが、グループの中での自身の位置、他者の理解に役立つことを示している。

ブロック技法は、ブロックを素材として表現を行う芸術療法の技法の1つである。臨床場面におけるブロックの活用の可能性は、今川・大西ら（1985）、入江・大森（1991）、入江（2004）などによって検討されてきた。これらの研究をふまえて、加藤（2006）は、箱庭療法やコラージュ療法などの、構成的な特徴を持つ技法の理論をもとに、保障された枠組みの中で様々な種類のブロックを用いて表現をする方法を試みた。さらに、ブロック技

法の治療的効果を検討することを目的とし、ブロック制作の前後における制作者の気分の変化が検討された。この結果、ブロック技法を体験することにより、緊張、怒り、混乱、疲労などのネガティブな感情が軽減されることが示された。

ブロック技法は、理論的枠組みにおいて、コラージュ技法と共通する部分も多く、その効果にも共通するところが大きいと考えられる。そのため、教育現場などにおける、グループでの制作という活用の仕方も可能なのではないかと考えられる。また、ブロックは元来、遊びのツールとして親しまれており、取り組みやすい素材であることから、教育現場において、生徒どうしの関係性を促進させる技法の1つとしても活用が可能であると考えられる。そこで、本研究においては、高校生を対象とし、グループにおける協同ブロック制作を試み、その体験を検討することを目的とする。

また、協同制作による体験や、関係性に与える影響を検討する上で、比較対象を設定することは、その独自性や共通性を考える上で重要であると考えられる。そこで、本研究においては、協同ブロック制作に先立って、個別描画体験を実施し、その体験との比較を通して、他者と協力して表現をすることによって得られる体験を検討する。芸術療法の分野において、古くから活用されてきた技法として、個人絵画療法がある。自由画、課題画、それぞれ多くの技法が開発され、様々な領域で活用されている。この中に、ワルテック描画法がある。これは、一定の刺激図形をもとに、自由な描画を加えることで表現をする技法であり、主に、パーソナリティなどを理解することを目的として利用されている。用紙には8つの大きい枠で区切られた領域があり、その中に、点や直線、円弧など、様々な形の刺激図形が描かれている。これらの刺激図形に対し、どのように反応し、何を表現するかを通して、制作者の特徴を考えていく。杉浦（2002）は、絵画療法の目的の1つとして、描画という非言語的な表現を通じて自己理解や洞察を深めることを挙げている。ワルテック描画法は、自由画と課題画の両方の性質を兼

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

ね備えており、刺激画を手がかりに自由な表現ができることが特徴である。そのため、まったく何も無い状態から表現をするよりも取り組みやすく、ブロック制作の前のウォーミングアップとして、また、自分自身と向き合う機会として活用することができると考えられる。本研究においては、ブロック協同制作の前に、ワルテック描画法を参考に、刺激画を用いて自由な描画をする体験を実施し、両者における体験を比較検討する。

II. 方法

1. 対象と場面設定

本研究における調査は、名古屋大学教育学部が主催する、高校生を対象とした、人間発達科学探究講座（サマースクール）における1つの講座の中で実施された。この講座は、講義や体験学習を通して、臨床心理学や臨床心理実践について学び、他者との関係性について考える機会を持つことを目的としたものである。高校2年生19名（女子18名、男子1名）が、2つのグループに分かれて、本講座に参加した。1日目には9名、2日目には10名の生徒が参加した。1つの講座の時間は2時間半であった。

2. 手続き

本講座では、はじめに、担当教員による臨床心理学に関する講義が行われ、それに引き続き、大学院生による臨床心理実践や研究の紹介、質疑応答が実施された。その後、個別描画体験と、協同ブロック制作が実施された。

個別描画体験では、投影描画法の1つである、ワルテック描画法を参考に、あらかじめ用紙に印刷された半円の弧を使って、自由に絵の続きを描くことが求められた。

協同ブロック制作では、1日目、2日目ともに、参加した生徒が、ランダムにA、B、Cの3つのグループに分かれた。各グループの人数は3~4人とした。レゴブロックを用いて、グループごとに協同して1つの作品を制作した。

素材としては、直方体の基本的なブロックや、窓枠やタイヤなど特殊な形状をしたブロック、レゴの既製の人形などが用意された。これらの素材が、1つの大きな箱の中に用意され、生徒たちはこの中から好きなものを選んで制作に取り組んだ。また、制作の際は、25cm×25cmの緑色の基礎板を正方形に4枚配置し、その板上で自由な表現が行われた。

Table 1 制作の感想の分類

他者との関係性に関する感想	新鮮さ	最初は、こんなことやるとか思ったけど、やりはじめたら、面白くてもっとやりたかった。初めて会った子といろいろ相談しながらやるのは新鮮で楽しい。童心にかえった気がしてとても楽しかった。仲間と意見を出し合い1つのものを作るのは新鮮。何も知らなかった子の内面が少しわかったと思う。
	楽しさ	すごく楽しかった。一緒に作業することでみんなが仲良くなれたような気がした。時間を気にしないで楽しいことに集中したのは久しぶりだったのでよかった。すごく楽しかった。最初は分担していたけど、後半はみんなで1つのものを作った。1人がアイデアを出して、他の人がどんどんつけたしていくように…。その時が一番楽しかった。
	他者への関心	小さい頃よく遊んだのを思い出した。懐かしい。こんなに多い人数でやることはなかったの、みんなは何を作っているのかなと思い、他のグループのも見ていた。楽しかった。考えることがそれぞれみんな違って、おもしろいなと思った。けっこう脳を使った気がする。それぞれの個性が板の上で共存している感じ。こんな場所がホントにあったら…。他の人の作ったものに自分の工夫も加えたりできて、いろんな創造ができて楽しかった。自分以外の人の考えも分かったので面白かった。
	両価的な感想	かなり怖い部分もあるけど、みんなで人をいっぱいのにぎやかにできてよかった。みんな意見が言い合えてよかった。
内的な体験に関する感想	心理的退行・子ども時代への回帰	何でもかんでもくっつけたって感じだったけど、ちょっと懐かしかった。保育園のころよく取り合っていたのを思い出した。なんとなく新鮮な気分。子どものかえった気分が楽しかった。好きに作っていいのがうれしいけど、行動に迷いが出た。なぜ今はこういう遊びをしないのかと不思議に思った。すごく懐かしかった。自由に作っていいと言われると何をしようか考えて、わくわくして楽しかった。
	洞察・自分への気づき	作り始めた時は、ただ単に懐かしいとか改めて面白いとしか思わなかったが、やっていくうちに、昔は思いつかなかったことを思いついたり、考えようともしなかったことを今はやっていたのでビックリした。童心にかえれた感じがして楽しかった。自分って思っていたよりも創造性（想像性）があるなあ、と自分を見つめ直した。
	カタルシス	何を作るかいろいろ考えたのですっきりした。素直に楽しかった。
	制作の難しさ・引き込まれる感覚	作品として上手ではないし、まとまりもないけど、自由に付けていけて楽にできた。レゴをやるのは初めてで、最初はとまどったけど、やるうちに何だか引き込まれていく感じがした。全く何も無い状態から何かを作るって結構難しいんだなあと思った。何を作るか迷った。スペースが上手く使えなかったのが残念。作り始めてからはちゃんとできて楽しかった。

制作後に、ブロック制作の感想と、個別描画体験と協同ブロック制作における体験の比較が、それぞれ自由記述形式で尋ねられた。

Ⅲ. 結果

自由記述による制作の感想が、KJ法（川喜田，1970）を参考に整理された。ブロック制作の感想と、個別制作との比較のそれぞれが、まず、第一著者によって、2階層から成るカテゴリに分類された。さらに、第二著者によって、分類の妥当性が検討された。最終的に、両者の合議の末、各カテゴリが決定された。

制作の感想は、まず、第一階層として、8つのカテゴリに分類された。具体的には、「新鮮さ」、「楽しさ」、「他者への関心」、「両価的な感想」、「心理的退行・子ども時代への回帰」、「洞察・自分への気づき」、「カタルシス」、「制作の難しさ・引き込まれる感覚」の8カテゴリに分類された。さらに、これらのカテゴリが、第2階層として、「他者との関係性に関する感想」と、「内的な体験に関する

感想」の2つに分類された。制作の感想の分類をTable 1に示した。

個別描画体験と協同ブロック制作の比較に関しては、まず、第一階層として、7つのカテゴリに分類された。具体的には、「活性化・幅の広がり」、「受け入れられる安心感」、「互いの個性への気づき」、「夢中になる感覚・負担の軽減」、「責任感の分散」、「他者と協力することの良さ」と「他者と協力する難しさ」の7カテゴリに分類された。さらに、これらのカテゴリが、第2階層として、「関係性のポジティブな側面」、「関係性に対する両価的な感想」、「関係性の難しさ」の3つに分類された。個別描画体験と協同ブロック制作の比較をTable 2に示した。

考察

1. 制作の感想

協同制作の感想は、大きく分けて、「他者との関係性に関する感想」と、「内的な体験に関する感想」の2つ

Table 2 個別描画体験と協同ブロック制作の比較

関係性のポジティブな側面	活性化・幅の広がり	1人で描いた時は自由な表現ができた。大勢でやると自分の思うことをそのまま表現するのは難しいが、色んな想像ができて楽しかった。作りながら、意見を取り入れ発展させていくのも面白いと思った。 いろいろ考えたり、刺激され合ったりしながらできた気がする。 みんなでやると自分以外の意見が出て幅が広がる。 他の意見や考えを取り入れた方が、いろんな方向にふくらみがあって、工夫の幅が増えたと思う。
	受け入れられる安心感	みんなで表現した方が楽しさ倍増。自分の考えに共感してくれる人がいて安心するし、自分では思いつかないようなアイデアを受けて新鮮な感じがした。 自分では浮かばないアイデアを教えてもらった。自分のアイデアを受け入れてもらえた時にうれしかった。
	互いの個性への気づき	意見を出し合うからいろいろなアイデアが出てきて面白かったし、手分けして作ることができたから、それぞれの個性が出た気がする。 グループで表現すると、一人一人違ったイメージを持って作るから、個性が詰まった面白い作品になったと思う。
	夢中になる感覚・負担の軽減	一人の時は、「どう描こう」と考えながらやったけど、みんなでは表現する時は、勝手にどんな手が動いてすぐ夢中になった。 みんなで作ると楽しくなる。話をしながらできるし、こんなんでいいのかなあと思っても言えるから笑ってできる。一人だと悩んでいても、答えが出ないから手が止まってしまう。 グループでやった方がアイデアがふくらむ。また、他の誰かのものを見て、自分に活かすことができる。一人でやった方が負担が大きい。
	責任感の分散	一人だと自分の思うままにやらないといけないけど、グループだと何か適当な感じになって、責任感がなくなった。
関係性に対する両価的な感想	他者と協力することの良さと難しさ	他人とアイデアを共有することで、良くも悪くもなる可能性があるが、それが許せるならば、心の中が広くなると思う。自分の意見や隠れた意志が反映され、それが認められ、許される気がする。 みんなで冗談を言ったり、思いもつかなかった新しい考えが出てくるとすごいし、ちょっと仲が深まった気がする。自分の思い通りにいかない時もある。 他の人の意見を尊重しながら作ったから、最初に自分がイメージしたものではないものを作ることになったが、他の人の発想に感心したし、面白かった。
関係性の難しさ	他者と協力する難しさ	一人の時は自分が考えたことを作るだけだが、みんなでは表現する時は、いかに上手く一人一人の考えをまとめて、みんなが納得するものを作らなければならないと思う。 一人だと自分の頭の中でイメージするだけでよかったけど、ブロック制作はそれを口に出して伝えなければいけなかった。 協調性が大事。どちらかという一人の方が楽なので、グループの時も黙々とやっていた気がする。 相手の作っているものを見ながら作るわけだから、多少なりとも気を遣う。

に分類された。約半数の生徒が、他者との関係性に着目し、残りの半数が、内的体験について言及している。

他者との関係性に関しては、「新鮮さ」、「楽しさ」、「他者への関心」、「両価的な感想」の4つのカテゴリが含まれた。「新鮮さ」や「楽しさ」については、他者と協力して制作することによる、新たな気づきや、共に作業をすることの楽しさを反映していると考えられる。「他者への関心」については、制作を進める過程で、自分とは異なった考え方や、それぞれの個性を知る機会が得られ、それが関心の高まりに結びついたのではないかと。「両価的な感想」には、作品もしくは制作自体に対する怖さと、他者と意見を出し合うことに対するポジティブな感情の両面が表されている。今回の調査では、重篤なネガティブな感想は見受けられなかったが、その場で初めて出会った生徒どうしがグループに分かれて制作をするという設定であったことから、対人的な緊張を感じやすい人にとっては、負担が大きかったかもしれない。実際に、教育現場などにおいて導入する際にも、このような経験をする生徒がいるかもしれないという可能性を考慮した上で、必要があればフォローをするなどの配慮が求められると考えられる。

内的な体験に関する感想としては、「心理的退行・子ども時代への回帰」、「洞察・自分への気づき」、「カタルシス」、「制作の難しさ・引き込まれる感覚」の4つのカテゴリが含まれた。

「心理的退行・子ども時代への回帰」、「洞察・自分への気づき」、「カタルシス」というカテゴリは、先行研究によって得られた、個別制作場面における、芸術療法の治療効果に関する知見と共通するものである。杉浦(1994)は、コラージュ療法の治療的効果に関連する体験として、「心理的退行」、「自己表出・カタルシス」、「内面の意識化」などをあげている。また、加藤・原口・森田(2006)は、芸術療法における体験過程に関する尺度を用いて、コラージュ技法や、風景構成法との比較から、個別ブロック制作における体験を検討した。その結果、ブロック技法によって得られる体験として、「子ども時代への回帰」、「自己表出・カタルシス」、「内面の意識化」などが示された。「心理的退行・子ども時代への回帰」に関して、ブロックという素材は、それ自体が遊びの要素を多く含むものであり、また、他者と一緒に何かを作り上げるという体験が、心理的退行を促進させると考えられる。「洞察・自分への気づき」については、他者と一緒に制作をすることにより、自分と他者の違いや共通性に気づき、それが自分自身について考える機会につながったのではないかと。また、杉浦(1994)は、コラージュにおける自己表出やカタルシスに関して、「台紙と

いう守られた枠の中で何を表現しても構わない。それゆえ自己表出が行われやすくなると言えよう」と述べている。このように、自己表出やカタルシスの側面に関しては、制作者が安心して自由な表現ができることが重要であり、その意味から、「枠」の存在が大切な役割を果たしていると考えられる。本調査では、教室やグループという枠組みの中で、担当教員や大学院生が見守る中で制作が実施された。また、各グループによる自由な表現は、基礎板という保障された枠組みによって守られていた。このような「枠」の存在は、生徒たちが安心して自由な表現活動を行い、カタルシスの効果を得る上で重要であると考えられる。

「制作の難しさ・引き込まれる感覚」というカテゴリもまた、ブロック制作によって生じる内的な体験を検討する上で重要な要素を含んでいると考えられる。イメージを形にし、表現するというプロセスの中には、様々な試行錯誤や、困難さなどが含まれていると考えられる。さらに、制作の中で生じるこのような難しさによって、表現ができた時の達成感や、引き込まれる感覚が喚起されているのではないだろうか。

2. 個別描画体験と協同ブロック制作の比較

個別描画体験と協同ブロック制作の比較に関しては、大きく分けて、「関係性のポジティブな側面」、「関係性に対する両価的な感想」、「関係性の難しさ」の3つに分類された。すべての感想が、他者との関係性について言及されていたことが特徴的である。これは、個別描画体験と協同ブロック制作の両方を体験し、比較することにより、他者との関係性がより強く意識されたためであると考えられる。

関係性のポジティブな側面としては、「活性化・幅の広がり」、「受け入れられる安心感」、「互いの個性への気づき」、「夢中になる感覚・負担の軽減」、「責任の分散」が含まれた。

杉浦・鈴木ら(1997)は、集団コラージュ制作の効果について、他者のイメージを自己に取り入れることによって、自己の変容、自我の充実、拡大へと到達すると考察している。集団ブロック制作においても、他者と協同して1つの表現をするというプロセスの中では、自分のイメージや考え方、感性などについて、他者との比較が自然に行われていると考えられる。他者の視点を獲得することは、より自分自身を強く意識し、自分の新たな一面を発見することにもつながるのではないかと。このような体験が、「互いの個性への気づき」や、「活性化・幅の広がり」として現れていると考えられる。本研究では、高校生を対象とした調査が実施された。自分自身のアイ

デンティティについて考え、対人関係における互いの距離感などがある程度確立された高校生という時期だからこそ、互いの個性の違いをポジティブに認め合うことができたのかもしれない。この点に関しては、年齢や性別などによる影響を受ける可能性もあるため、今後の検討課題の1つとした。

「負担の軽減」、「責任の分散」という体験は、他者と一緒に制作することにより、個人の責任や負担が軽減したことによって得られたと考えられる。本研究では、個別描画体験との比較を行った。ブロック制作に比べ、描画法では、より表現の自由度が高く、絵を描くということに不慣れな人や苦手意識を持つ人にとっては、負担を感じることもあったかもしれない。ブロック表現では、他者と協同で制作することに加え、素材の組み合わせによって表現をすることから、絵を描くことが得意でない人にとっても、負担や責任を感じることなく取り組むことができたのではないだろうか。過度の負担が生じにくいという点は、実際の教育現場などにおいて協同ブロック制作を導入する上でポジティブな側面であると考えられるが、これらの要素が関係性に与える影響に関しては、慎重に今後も検討を重ねていきたい。

また、「受け入れられる安心感」というカテゴリは、協同ブロック制作の効果を考える上で重要な側面の1つであると考えられる。加藤（2006）は、高校生を対象に、学級におけるコラージュ制作を試みた。その結果、コラージュ制作を媒介として生徒どうしおよび生徒と教師のコミュニケーションが生まれる可能性が示唆されると同時に、生徒の表現を受け止める教師の存在や、教師と生徒、また生徒どうしの人間関係が重要であることが示された。本研究では、参加した生徒どうしは、本講座において初めて出会う人も多かったが、担当教員や大学院生に見守られる環境で、保障された枠組みの中での表現活動が実施された。また、ブロック表現に先立って、個別描画体験をしたり、自己紹介を行ったりしたことが、互いの緊張を和らげることに繋がったかもしれない。

「関係性に対する両面的な感想」、「関係性の難しさ」としては、「他者と協力することの良さ」と「他者と協力することの難しさ」が含まれた。「他者と協力することの良さ」と「他者と協力することの難しさ」というカテゴリに含まれる感想では、自分のイメージ通りにはいかないこともあるが、他者の存在によって、気づきがあったり、互いの仲が深まったりするという体験について言及されている。このように、他者と協力して何かを表現する場面では、自分の思い通りにならなったり、相手と意見が対立したりすることもあるだろう。そうした時に、互いにコミュニケーションを交わすことは、相手をよりよく知るきっかけとなり、

また、互いの関係が深まることに通じるのではないだろうか。協同してブロック表現をしていく上では、コミュニケーションが重要であり、このことは、個々のソーシャルスキルを促進させる効果もあると考えられる。「他者と協力する難しさ」には、イメージを言葉にして相手に伝えることの難しさや、相手に気を遣った体験などが含まれた。これらの感想は重篤なものではないが、実際の教育現場などで導入する際には、このように、他者と協同で作業することによって困難さを感じる生徒が存在する可能性もあることに留意することが必要であろう。ブロック制作の場合、ブロックという素材がコミュニケーションの媒介となるため、直接相手と意見を交わすような場面に比べて負担は少ないと考えられる。そのため、制作の流れの中で自然に生徒どうしのコミュニケーションが促進されることが期待される。しかし、極度に対人的な緊張が高い場合などには、環境の調整など、見守る側の配慮が必要であると考えられる。

本研究の結果から、生徒のコミュニケーションの媒介や関係作りの手段として、ブロック技法を活用できると考えられるが、実際の教育現場などにおいて活用するためには、生徒たちが安心して制作に取り組める環境を整えることや、生徒たちの関係性に配慮することなどが重要であろう。

おわりに

本研究では、高校生を対象として、グループにおける協同ブロック制作を試み、制作における体験が検討された。参加した生徒の感想を分類した結果、内的な体験に関する記述や、他者との関係性に関する記述の両方が認められた。本研究で認められた内的体験は、先行研究で示された個別ブロック制作における体験と共通する部分も多く、自分への気づきやカタルシスなど、心理的にポジティブな効果が得られることが示された。また、他者との関係性が意識される点は、協同制作における体験の独自性であると考えられる。この点に関しては、個別描画体験との比較を通してより明確に示された。他者と協同して表現活動をすることで、相手を知ると同時に自分自身を理解し、互いのコミュニケーションが促進されたと考えられる。本研究の結果を参考に、教育現場などにおいて、生徒の自己理解や、互いの関係性を促進するための媒介として、ブロックを用いた表現を活用することができるのではないだろうか。今後も、関係性やソーシャルスキルをはじめ、年齢や性別などの様々な観点から、協同ブロック制作の効果を検討していきたい。

付 記

本研究は、名古屋大学中等教育センター紀要第7号に掲載された報告をもとに、新たなデータと分析を加え、論文としてまとめたものである。サマースクールに参加し、研究にご協力いただいたみなさまに感謝いたします。

引用文献

- 青木智子 (2001). グループにおけるコラージュ技法導入の試み: コラージュエクササイズを用いたグループエンカウンターと気分変容についての検討 日本芸術療法学会誌, 32 (2), 26-33.
- 今川正樹・大西道生・山口直彦・中井久夫 (1985). 面接後ブロック構成について 日本芸術療法学会誌, 16, 41-46.
- 入江茂 (2004). ブロック技法を介した場面緘黙児の精神療法過程 高江洲義英, 入江茂 (編), コラージュ療法・造形療法, 岩崎学術出版社, 39-58.
- 入江茂・大森健一 (1991). 相互ブロック作りを介した場面緘黙児の精神療法過程 日本芸術療法学会誌, 22 (1), 50-60.
- 加藤大樹 (2006a). ブロックを用いた表現技法に関する基礎的研究—POMSによる気分変容の検討および気分と作品特徴の比較— 日本芸術療法学会誌, 35 (1, 2), 52-62.
- 加藤大樹 (2006b). 高校生の学級における個別コラージュ制作の試み—気分変化と作品特徴からの検討— 学校カウンセリング研究, 8, 17-22.
- 加藤大樹・原口友和・森田美弥子 (2006). 芸術療法の諸技法における体験過程に関する研究—コラージュ・風景構成法・ブロック技法の比較— 第38回日本芸術療法学会発表論文集, 7.
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法 KJ法の展開と応用 中央公論社.
- 森谷寛之 (1988). 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用 精神神経学雑誌 90 (5), 450.
- 森谷寛之・杉浦京子 (1993). コラージュ技法の導入方法 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂他 (編), コラージュ療法入門, 創元社, 5-14.
- 杉浦京子 (2002). 臨床心理学講義—実習を通して学ぶ— 朱鷺書房.
- 杉浦京子 (1994). コラージュ療法—基礎的研究と実際— 川島書店.
- 杉浦京子・鈴木康明・金丸隆太 (1997). 集団コラージュ制作の効果: 社会心理学的, 臨床心理学的考察 日本医科大学基礎科学紀要 23, 1-15.
- 鈴木康明 (1999). 異文化間カウンセリングにおける「サラダボール・コラージュ」 現代のエスプリ 386, 至文堂, 211-218.

(2007年9月28日受稿)

ABSTRACT

The Psychological Effects of Expressing Something using Blocks with Others:
Comparison with Effects of the Individual Drawing Technique

Daiki KATO, Kyoko HATTORI, Satomi ITO, Miyako MORITA

The purpose of this study is to examine psychological effects of expressing something using blocks with others. Block is used as a material of art therapy and expressing something using blocks has positive effects on our mood. It is considered that this expressive technique can be used in a group and we examined its effects.

Nineteen high school students participated in this study. First, they experienced the individual drawing technique. After that, they were divided into 3 groups and each group worked together to represent something using blocks. After the work, they discussed and shared their experiences with one another. As a result of analysis, it is revealed that students were able to gain cognition of the significance of human relations, interest in other people, and awareness of themselves through the work.

Key words: block, human relations, high school students